

ブライダル司会者の現状と課題

——その誕生と普及を、日本の結婚式・披露宴の変遷からたどる——

廣 澤 美 花

はじめに

「ブライダル司会者」とは、どのような仕事なのだろうか。ここに着目した理由は、筆者自身が携わっているにもかかわらず、改めて「ブライダル司会者」という職種に関心を抱いたからである。海外では珍しい日本特有の職種であり、かつ女性が多く従事しているこの職種に着目し、ここから、「女性のキャリア」について、今後研究したいと考えている。本論文をその一つの足がかりとしたい。

そこで、本論文では、ブライダル司会者が誕生し、普及してきた経緯を検討するために、まずは、先行研究・文献資料をもとに、明治期以降の日本の結婚式・披露宴の変遷をたどる。次に、筆者が実施したブライダル司会者 14 名のインタビューから「仕事のやりがいと問題点」「ブライダル司会者のキャリア構築」について考察する。

1. 日本の結婚式・披露宴の変遷

かつての日本の結婚式の特徴に、「宗教性を見い出すのは困難」とであると、石井研士は述べているが（石井 2005）、明治維新により、民衆の生活が大きく変容し、結婚式も変貌を遂げるようになった。宗教者が司る「神前結婚式（以下、神前式）」の誕生である。

昨今の主な挙式スタイルは、この神前式、そして「キリスト教結婚式（以下、キリスト教式）」と「人前結婚式（以下、人前式）」の三つで、一般に「古式ゆかしい」と思われている神前式は、実は後者二つよりも新しい挙式スタイルであり、つまりボブズボウムらがいう「伝統は創られた」という現象の一つである（ボブズボウム・レンジャー（編）1992）。

1.1 三つの挙式スタイルの始まり

まず「神前式」は、1900（明治 33）年、のちの大正天皇である嘉仁親王のご成婚が、宮中の賢所にて、神道の形式で執り行われ、これが、現在の「神前式」のルーツであるとされている。梅棹忠夫によれば、それより前の明治 20 年代に、出雲大社が神前式を執り行っていたという指摘等諸説あるが（梅棹 1990）、1901（明治 34）年に、日比谷大神宮（現在の東京大神宮）にて模擬結婚式が行われ、翌年、同大神宮で実際の神前式が執り行われたのが、最初の神前式であるといわれている（石井 2005）。

次に「キリスト教式」は、同志社の創立者である新島襄が、1876（明治 9）年に、デイヴィス宣教師の司式により挙式したので、神前式より前に行われていた（同志社（編）2013）。

三つ目の「人前式」はどうであろうか。明治以前、民俗学の柳田國男等が指摘しているとおり、時代・地域によってさまざまな結婚風習が行われていたが、日本の伝統的な婚礼は、一般的に家庭で行われ、盃を交わして両家の絆を深め、親族や近隣の人々へお披露目をするというものであった。このような婚礼の場合、宗教的要素がみられないので、人前式という範疇に入れるのが適切であろう（志田 1991）。

1.2 神前結婚式の普及と各挙式スタイルの実施率の変化

三つの挙式スタイルのうち、後から「創られた」神前式は徐々に普及していったが、神社以外の場所での挙式

を促したのは、「永島婚礼会」の登場である。

永島婚礼会は、東京市麻布区で結納品調達商を営んでいた永島藤三郎が、明治 40 年代に創立した。その特徴は「出張式」で、神主や巫女とともに、儀式に必要な道具一式を運び込んで、自宅や会館等で式を挙げる可能性を広げた(石井 2005・2014、志田 1991)。

転機は、1923(大正 12)年に関東大震災が起こり、被害の少なかった日本初の本格的洋風ホテル「帝国ホテル」(1890 年開業)が、一手に結婚式の需要を引き受けるようになったときである。しかし、高級ホテルゆえに、利用者は、華族や一流実業家等の上流階級の人々に限られていたが、折しも、一般庶民も、自宅での結婚式から神社での挙式、そののち料亭等で披露宴という方向へ、次第に変化していった。1934(昭和 9)年、東京市目黒区に本格的な神殿を常設した「雅叙園」が完成し、総合結婚式場の先駆けとなった(石井 2005、田澤・境 2004)。

1945(昭和 20)年に第二次世界大戦が終結し、当時の婚礼は大変困難であったが、多くの男女が結婚を望み、1947(昭和 22)年に、婚姻率は戦後最も高くなった。一方で、明治神宮は、1946(昭和 21)年に宗教法人となり、翌年 11 月に、総合結婚式場「明治記念館」を誕生させた。神社は、戦前まで国家の保護を受けていたが、戦後、国家神道の支えを失い、積極的に挙式を司ることによって生き残りをはかっていくようになり、神前式の普及を促した(石井 2005・2014、志田 1991)。

また、戦後のブライダル業界を変化させた要因に、冠婚葬祭互助会の活動がある。1948(昭和 23)年、「横須賀冠婚葬祭互助会」の誕生に続き、互助会直営の総合結婚式場が相次いで建設された。これらはメインの挙式を神前式にしていたので、これもまた神前式の増加という現象を招いたと考えられる(石井 2005、志田 1991)。

以上のように、神社での式は、昭和 20 年代後半から 30 年代半ばまで増加し、以後、挙式会場がホテル・結婚式場へと移行しつつも、1980 年頃まで長らく高いシェアを維持するが、80 年代後半からは緩やかに減少し、キリスト教式が増加し始める(石井 2014)。

1975(昭和 50)年、東京の京王プラザホテルが、ホテルで初の常設「チャペル」を設置したことは、当時非常に画期的であった。さらに、1981(昭和 56)年、ダイアナ妃のロイヤルウェディング等を経て、芸能人の結婚式が多くテレビ中継されていた時代にチャペルも増加し、神前式の減少と相反するかのようになり、キリスト教式のブームは爆発的なものになった。1990 年代半ばには、神前式とキリスト教式の実施率は逆転したのである(田澤・境 2004)。

人前式については、2000 年代、ゲストハウス・ウェディングの台頭があり、挙式の場所を選ばず、そして、宗教者の関与しないスタイルが再び受け入れられ、増加し始めた。「ゼクシィ結婚トレンド調査 2017」による最新の挙式形式の割合(首都圏)は、キリスト教式 57.0%、人前式 22.7%、神前式 19.3%である(ブライダル総研 2018)。

1.3 明治期以降の披露宴の変容

明治時代に入ってから創り出された「神前式」により、式は神社で行い、写真館での記念撮影後、料亭やホテル等で披露宴というパターンができたが、挙式と披露宴を同じ場所で行う始まりとなったのは、帝国ホテルである。さらに同ホテルは、挙式・披露宴に加え、美容・着付けや写真撮影等をすべてセットにした新しいサービスを考案し、ここに、現在の「ホテルウェディング」の原型をみることができる(石井 2005)。

戦後、全国で続々と専門結婚式場が開業し、また、連合軍に接収されていたホテルが返還されたり、営業を再開するホテルがあったりと、ホテルでの披露宴が広まり始めた。

1960 年代の後半には、団塊の世代が結婚適齢期を迎え、年間婚姻数が 100 万組を超えた。披露宴の列席者数が増加し、1970 年頃にはさまざまな演出が提案され、「ケーキ入刀」「花束贈呈」がポピュラーになり、婚礼衣装のお色直しの回数も増加した(石井 2005・2014、志田 1991)。

バブル経済を迎えた 1985 年頃には、豪華で派手な披露宴を求める「ハデ婚」が登場する。シャンパンタワーにキャンドルサービス、ドライアイスのスモークのなか、ゴンドラに乗って新郎新婦が登場するといった演出をする等、披露宴に多額の費用がかけられた。1989(平成元)年 1 月、昭和天皇崩御に伴い、自粛ムードが高まり、続くバブル崩壊の影響を受け、披露宴はシンプルな「ジミ婚」へと変化する。そのようななか、ホテルは関連企業を巻き込み、ウェディングビジネスへの進出が本格化し、1990 年代、ホテルウェディングを中心とした業界勢力図が

形成され、ブライダル業界を牽引していった（田澤・境 2004）。

バブル崩壊以降、披露宴は方向転換する。今や主流となった「オリジナルウェディング」と呼ばれるスタイルへ、脱画一化、個性化へとシフトし始めるのである。

堂上昌幸によれば、オリジナルウェディングという概念は、「70～80年前後に起業した『ウェディングプロデューサー』たちの手により、『レストランウェディング』として登場」した（堂上 2006）。この「オリジナルウェディング」とは、披露宴を自由に組み立てて、二人の個性にあわせてコーディネートすることであるが、21世紀に入り、ホテルや結婚式場でも、そのスタイルが増加した。

ブライダル業界において、この「オリジナルウェディング」は、現在も続くキーワードである。リクルートブライダル総研所長の田中巖によれば、「ハデ婚」から「ジミ婚」を経て、2000年代は、自宅にゲストをお招きしたようなおもてなしを目指す「アットホーム婚」が人気となり、2010年代は、東日本大震災の影響もあるのか、絆を大切に「つながり婚」が主流となる。最近のトレンドは、喜びをゲストと一緒に共有できるような参加感を高めた「シェアド（shared）婚」だという（田中 2014）。このように、毎年さまざまな造語が生み出され、ブライダル業界に影響を与え、このオリジナルウェディングの流行によって、挙式の形式にかかわらず、披露宴は非常に多様化してきている。

団塊ジュニア世代が結婚適齢期を迎えた2000年代のスタイルは、初婚年齢の上昇に伴う晩婚化の影響を受けているといわれている。1947（昭和22）年では、平均初婚年齢は夫26.1歳、妻22.9歳だった。2000（平成12）年には、夫28.8歳、妻27.0歳となり、以後、上昇は続き、2015（平成27）年には、夫31.3歳、妻29.4歳になった。

独自のライフスタイルを持つ男女は、結婚する際に、いろいろな「こだわり」をみせる。既成の商品では満足しないからである。そこには、『ゼクシィ』といった結婚情報誌やインターネット媒体の普及による情報の多様化も影響しているだろう。

レストランウェディングやリゾートウェディング、親族中心の少人数のウェディングや友人中心のカジュアルな会費制のパーティーウェディング、洋風邸宅を貸し切ったゲストハウス・ウェディング等、新郎新婦のニーズにあった場所・スタイルでの挙式・披露宴が人気となり、また、顧客ニーズの多様化によってブライダルプロデュース会社が続々と誕生した。そして、よりアットホームな雰囲気とオリジナリティを重視するスタイルが、昨今好まれる傾向にある。田澤昌枝・境新一は、「今後、挙式・披露宴に対する顧客のニーズは年々高度になっていく」と分析している（田澤・境 2004）。

2. ブライダル司会者の誕生と普及

次に、司会者の誕生についてまとめてみたい。

披露宴の原型は会食のみだったが、挨拶や乾杯等が行われるようになり、明治記念館は、1955（昭和30）年に「御結婚式・御披露宴の栞」を、翌年には「司会のすすめ方と話し方（例）」を作成し、これらはすぐさま全国の結婚式場へ普及した。

1.3で述べたように、1970年代、高度経済成長期の後半に、団塊の世代が結婚適齢期を迎え、空前の結婚ラッシュが起こり、経済的な繁栄を背景として、豪華な披露宴が行われるようになった。ケーキ入刀や花束贈呈、キャンドルサービス等の演出が、次々と誕生し、普及していった。

このような演出の多い日本特有のスタイルで行われる披露宴を、滞りなく執り行うために誕生した職業が、プロのブライダル司会者である。志田基与師によれば、その役割は、進行係・紹介者という立場から、披露宴というショーの司会・演出を担当するようになった（志田 1991）。司会者と演出が、本格的に普及し始めたのは、1970年代後半からといわれている。

2.1 A 企画会社の歩み

以上、先行研究・文献資料をもとに「ブライダル司会者の誕生」までをたどったが、本節は、筆者が在籍する、A 企画会社（以下、A 社）の沿革を参考に、代表のB氏にインタビューさせていただいた内容の一部を報告する。

A 社は、1975（昭和50）年に、民放アナウンサー出身の女性10名でスタートした。この頃、大阪には司会者を

派遣する事務所は皆無に近かった。そして、A 社は、従来のブライダル司会者は男性が主流であったので、女性司会者を世に出すための戦略として、以下の三点をアピールして、会場側に受け入れられた。第一点は、男性司会者よりも女性司会者の「司会料を安く」したことである。第二点には、当時はアナウンサー出身者が個人的に直接仕事を受けていたのであるが、個人で司会を請負うのは「急病等や突発的な事故の場合のリスクがあるので、個人請負から会社請負へリスク管理のアピール」をしたことである。第三点は、新郎新婦との打ち合わせ時や披露宴当日に細やかな対応ができるということである。本論文では詳細に論じることはできないが、明るく柔らかいトーンの声と、新婦が話しやすい、相談しやすい女性の司会者は、顧客から求められるニーズにも即したのではないかと回顧する。

1995（平成 7）年に、創業 20 周年を迎え、ブライダル業界にはゲストハウス・ウェディングが生まれ、大きな変革のときを迎えた。A 社は、いち早く司会者派遣を行ったが、ホテルに比べ司会料が低額になるため、ゲストハウスに参入しない事務所もあった。

次のブライダルの波として、既存の会場に食事を手配してもらい、自らはプランニングをメインとすることで安く仕上げる「スマ婚」「楽婚」というサービスが始まった。これに伴い、さらに司会料も安く要求される一方、司会技術は高く要求され、B 氏は、「昔に比べ、司会者の位置づけが低く扱われていることに違和感を感じ、とても残念なこと」と述べている。

A 社は、2015（平成 27）年に創業 40 周年を迎え、現在、司会者・演奏者・エンターテイナー・研修講師として 500 名以上が在籍している。

3. ブライダル司会者の現状と課題

本節では、ブライダル司会者の現状と課題について考察する。

ブライダル司会者は、特定の日時に婚礼が集中し、季節による繁忙期もはっきりしているため、非正規雇用とならざるをえない。司会料は以前より低価格になり、さらに少子化・非婚化に伴い、婚姻数は年々減少し、今後ブライダル業界も縮小していくと推測される。このように、非常に不安定な職種であるにもかかわらず、なぜ司会者は、仕事を続けているのか。

まずは、実際に行っている業務について紹介する。次に、ブライダル司会者 14 名のインタビューをもとに分析を行う。なお、インタビュー調査を実施するにあたり、本学の研究倫理委員会で、実施方法及び質問内容について、問題がないと判定されたことを申し添えておきたい。

3.1 ブライダル司会者の業務内容

披露宴の司会は、ほぼ A 企画会社からの派遣で、関西で、ホテル中心に業務を行っている。受注は、早ければ挙式日の 1 年以上前から、直近であれば 1 ヶ月を切ることもある。打ち合わせは、挙式日当日の約 1 ヶ月前に行われることが多く、担当者からこれまでの決定事項・注意点等が伝達される。事前に仕入れた内容に加え、新郎新婦の意向を伺い、ときには司会者の方から積極的に聞き出し、進行表へ詳細に記入していく。進行内容にもよるが、確認事項は多く、この「披露宴の進行を組み立てる作業」をしながら、「短時間に新郎新婦から信頼を得ること」が、ブライダル司会者が業務時に、毎回乗り越えなければならない一つの大きな難関であろう。その際、新郎新婦から「世間体」を重んじる面と、人とは違うことがしたいという面を求められることもある。D. リースマンは、『孤独な群衆』のなかで、自分自身のパーソナリティと他人との差をわずかにつけることを、「限界的特殊化（marginal differentiation）」と述べているが、「他人指向型」の現代日本では、その限界的特殊化の部分が、披露宴にもあらわれているといえるだろう（リースマン 1964）。

披露宴当日は、開宴の約 1 時間前に会場入りし、スタッフとのミーティングを行う。問題がなければスムーズに終わるミーティングも、ときには、はじめて知らされる変更点や、同じく追加で入った新郎新婦もしくはゲストからの要望等を聞き、それに備え準備する。

いざ始まれば、「決して失敗の許されない披露宴」のなかで起こる諸問題にも、臨機応変に最大限に対応し、進めていく。

ブライダル司会者に要求される基準の一つとして、常に滞りなく披露宴が終了することは、当然の帰結である。だが、無事にこの任務を完了したとしても、「もっとできたのではないか」と、反省を繰り返している司会者も少なくない。

3.2 ブライダル司会者の仕事のやりがいと問題点

インタビュー対象者（以下、研究協力者、あるいは協力者とする）

女性 14 名、（ ）は司会者歴

A 企画会社所属 C 氏（約 17 年）、D 氏（約 33 年）、E 氏（約 20 年）、G 氏（約 22 年）、
H 氏（約 21 年）、I 氏（約 10 年）、K 氏（約 20 年）、L 氏（約 10 年）、
M 氏（約 20 年）、N 氏（約 13 年）、O 氏（約 12 年）、P 氏（約 18 年）

他司会事務所所属 F 氏（約 12 年）、J 氏（約 8 年）

インタビュー調査方法としては、あらかじめ質問項目を用意し、それらをおおまかな目安として、研究協力者に自由に語ってもらう半構造化インタビューを実施した。

3.2.1 仕事に取り組む姿勢

本項では、それぞれの仕事への取り組み方、その姿勢や思い等を考察する。

C 氏は「司会って感謝されるやりがいのある仕事です。（……）その人の人生にかかわっていくことができるんだな、とか。司会のちょっとした配慮や視点で、『活かされない人が活かされるんだ』って思ったりして」、F 氏は「ブライダル司会って、受けた時点でもう仕事が始まるじゃないですか。だから、いい加減な気持ちで絶対受けられない仕事なので。受けたら全力で、本番に向けて」と語った。P 氏は「たいていの新郎新婦は『誰でもいい』って思ってるよね。基本はね、誰でもいいと。だけどやる以上は、いい披露宴にしてあげたいと思うのが、プロの司会者だし、誰の記憶にも残らないけど、だけどスムーズに、みんなが喜んで、会場もお客さんも『ウィンウィン』で終わるようにするのが、やっぱり司会者だとは思うけどね」と話した。この「誰の記憶にも残らないけど」という言葉に、筆者も非常に共感する。表に立つ仕事ではあるが、ブライダル司会者は、けっして自分自身が主役ではない。「縁の下での力持ち」であり、「黒子」として、祝賀の場に携わることができるということに喜びを見出すような要素が必要だと指摘する。

3.2.2 仕事のやりがい

次に、協力者から多く語られた仕事へのやりがいについて、以下に 8 名の言葉を紹介しておく。E 氏「うれしな瞬間でもあるんですけど、こんなに『ありがとう』って感謝されることって、日常あまりないんじゃないかって」、G 氏「私は、ただただお客さんに恵まれている。（……）ブライダルぐらい好きな仕事はあらわれないような気がして。ブライダルが好きで、ずっとかかわっていたい」、H 氏「そんな儲かる仕事じゃないし、（……）でも、『私の仕事はこれです』って、自信をもっていえるかな」、N 氏「責任重大なお仕事なので、プレッシャーもあるんですけど、上手くいったときの仕事が終わった後の達成感みたいなものを感じられる。子どもを産んでも、幼稚園で何かイベントがあると、司会をさせてもらう機会があって、子どもが私の仕事をしてる姿を見て、すごく喜んでくれる。『ママ、格好良い』と思ってくれるのは、やっててよかったかなあと感じますね。子どものためにもなってるのかな」、O 氏「新郎新婦お二人と、あとゲストの皆様も『良かったなあ』といって喜んでいただいて、無事におひらきを迎えて、皆さん幸せな気持ちでいっぱいになってもらった、やっぱりお仕事が終わった瞬間の充実感」、I 氏「やりがいも感じるし、毎回毎回楽しくって」、J 氏「こんなに達成感を感じて、やりがいを感じる仕事はないと思ってます」、M 氏「やりがいがあると思えたのは 10 年越えてから」等々、仕事への熱意を感じる思いが多く語られた。

3.2.3 仕事の悩み

一方で、ブライダル司会者をしていて、つらかったことや悩みについて尋ねると、まず女性が仕事をするうえで、どのような職種でも直面するであろう「結婚・出産・子育て」が挙げられた。G 氏「私は主人との約束で、子どもの（学

校) 行事は何 1 つ穴をあけないって条件で」に続いて、「すごく理解があって、彼の援助がなければ、私はたぶんできないから」と語った。この問題点を指摘した多くの協力者が、夫や家族の支えがあり、仕事を続けていると述べていた。

また他には、ベテランゆえの悩みとして、M 氏が語った内容を要約する。ミスが少ないため長きにわたり仕事ができる。「絶対失敗しない」と思われることにより、さらに自分を追い込み、気の休まることがないということである。同様のつらさは多く聞かれた。

悩みは多様で、F 氏「私、外注なんで、スタッフさんに理不尽なことをいわれても、嫌な顔せずに笑顔で受けとめる」、H 氏「時間がきっちり決まっていない、そこに私はすごくストレスを感じる」、K 氏「新郎新婦との価値観が違いすぎるとき」、N 氏「何かトラブルがあったときの精神的な負担というか。(……) 困ったときに、すぐに自分一人で対処しなきゃいけないというのが、たいへん」等々、これらは「感情労働」へと繋がっていると推測する。

今回のインタビューで、各協力者へ「感情労働」について質問した。この概念は、A.R. ホックシールドが、『管理される心ー感情が商品になるとき』で、社会に投げかけた新しい概念であり、ここから「感情社会学」という新しい分野が展開されることになった。ホックシールドは、著書のなかで、航空機会社の客室乗務員を例に挙げている。重い食事カートを押して通路を通り、飲食をサービスする肉体労働を行ったり、緊急着陸をする際には脱出の準備をしたりと頭脳労働を行う。両者の労働を行いつつ、客室乗務員は別の労働、感情労働を行っているのではないかという (ホックシールド 2000)。ブライダル司会者の場合は、どうだろうか。

まず、「ブライダル司会者の仕事は感情労働である」と、その度合いは異なるが、ほぼ全員の協力者が答えた。ブライダル司会者と、ホックシールドの感情労働の例で挙げがっていた客室乗務員との違いは、披露宴には、さまざまな立場の顧客がいることである。客室乗務員が対象とする顧客の目的は、「航空機で移動する」という単一のものである。ところが、ブライダル司会者が対象とするのは、披露宴に参加している人たち全体で、立場によって、その目的が異なると考えられる。主役である新郎新婦、息子や娘の晴れの日を見守る両親、新たな縁が結ばれる親族、会社の上司、先輩、友人等々、祝われる側・祝う側でも、立場によってかわり方が違うため、たとえば、同じ混乱や困難に対しての捉え方が異なる事態が考えられる。そのような状況が起きたとしても、丸くおさめるブライダル司会者が行うべき行為は、E. ゴフマンがいう「状況に関して単一の定義を維持すること」ではないだろうか (ゴフマン 2002)。実際の現場では、瞬時の判断が求められることも多く、「これが最適なのか」と、筆者自身迷い悩むことはあるものの、ブライダル司会者という役割を通して、場面の秩序維持が揺らがないように、円滑な進行に心を砕いている。

3.3 ブライダル司会者のキャリア構築

次に、ファーストキャリアが、14 名ともブライダル司会者ではない点に触れる。個々人のファーストキャリアは、学生時代からタレント・ナレーターコンパニオンをしていた C 氏・F 氏。元タカラジェンヌ N 氏。元ピアノ講師からナレーターコンパニオン O 氏である。卒業後、就職した「いわゆる OL」経験者は 9 名であるが、そのうち、異業種からの出向先がテレビ局だったアナウンサー D 氏、所属された部署でのインフォメーションやアナウンス業務経験者が H 氏・K 氏・L 氏、学生時代からミュージカル劇団に入り OL と兼業 E 氏、テレビ・舞台等で活躍した子役を経て就職 G 氏である。J 氏・M 氏・P 氏も退職後、タレント事務所・DJ を経て、ブライダル司会者を始めた。異色の経歴は、国家資格の言語聴覚士をしながら、ブライダル司会者をしている I 氏である。

今回の調査で、協力者の 14 名は、まず何らかの「人前で話す仕事」を入りにして、ファーストキャリア、個人によってはセカンドキャリアを経て、ブライダル司会者になっている。ゆえに、ブライダル司会者という職種がファーストキャリアではないことが明らかになり、さらに、筆者自身にもあてはまることだが、ブライダル司会者はラストキャリアにならない可能性も大きいことが分かった。

研究協力者 14 名のうち、1 名は現在休職中である。司会者になってから (なる前から)、他の職種と兼務している者は、7 名である。その他の 6 名へ、「今後」について質問したところ、婚活 1 名、語学留学 1 名、未定 1 名、次のキャリアを模索中 3 名であった。

兼務している 7 名は、言語聴覚士 1 名、通訳 1 名、コンサルタント 1 名、他にはセルフマネジメント講師、マナー

講師、司会者養成講師、研修講師等、それぞれを重複して兼務している者もある。D氏は「司会が無くなってもいい、何かもう1つ別の、自分のその生涯続くような引き出しを作ろうと思って」と、堅実にキャリアを築いている。

ここで、司会者に必要な資質を尋ねた際の回答を記しておく。F氏は「臨機応変力が一番大事」、K氏は「しなやかな人間力」、L氏は「人の役に立つとか、そこのフォーカスがないと（……）。そこがコアな部分にないと、薄っぺらいものになる」といった内面的な答えとともに、他方でN氏は「人前に出る仕事だから、きれいでないといけない」、O氏は「自己メンテナンス」、J氏は「体調管理」、H氏は「視力、あと体力」といったように、年齢を重ねることで起こる葛藤もダイレクトに影響する職種であるといえるだろう。

次に、今後の不安について、J氏の「不安ですよ、やっぱりギャラのこととかあるし」というのは、率直な悩みであろう。E氏は「仕事はやりがいとかがないと続けられないだろうなって思って、（……）特に好きな司会の仕事で、こんなに『ありがとうございます』をいただいちゃうとね、人から感謝されない日々が来たときに、私はお金以上に、自分の存在が『誰からも感謝されない』、こっちのほうが不安なんです」と答えた。多くの協力が「オファーがある限り続けたい」と回答し、ブライダル司会者の仕事に、大いに魅力を感じている。

以上から考察すると、ブライダル司会者のみを長く続けていくことは難しいと考えられる。それゆえ、次の、もしくは他のキャリアを模索し、手に入れ、できることならば、並行してブライダル司会者を続けていきたいと願う者もある。すでに指摘したように、この仕事は、ファーストキャリアとして選択されることはなく、ラストキャリアにもなり難いかもしれない。

おわりに

「ブライダル司会者」という職種について考察するために、まず第1節では、結婚式と披露宴の変遷をたどった。明治期に、神前式とキリスト教式が誕生し、長らく多く行われてきたが、2000年代にブライダル司会者が司式を執り行う人前式が増加してきた。これら三つの挙式スタイルにかかわらず、披露宴の演出は1970年頃から多様化してきた。

第2節では、日本の披露宴は年々演出が多くなったため、プロのブライダル司会者という職種が誕生したことを確認した。さらに、A企画会社の歩みからは、司会者の位置づけの移り変わりが明らかになった。まず、ブライダル司会は男性から女性が多く従事する職種へと変化した。また、多様化する顧客のニーズに伴い、司会技術は高く要求される一方、司会料は年々引き下げられ、司会者の位置づけが低く扱われているということである。

第3節では、主として、ブライダル司会者へのインタビューをもとに論述した。この職種のキャリアの特性は、別の職種から移ってきた者が多いので、ファーストキャリアでもなく、そしてラストキャリアにもならない可能性が高い点である。また、業務に対し達成感や充実感を持ちつつも、「絶対に失敗できない」というプレッシャーのなか、収入が少ないため複数のキャリアを並行させなくてはならない状況であっても、「それでも続けたい」と願うブライダル司会者たちの姿を示すことができた。

今後、さらに個別の部分を掘り下げて、「女性のキャリア」について研究を継続していきたい。

《参考文献》

- 石井研士、2005、『結婚式－幸せを創る儀式－』、日本放送出版協会
石井研士、2014、「夫婦となる」、全日本冠婚葬祭互助協会（編）、『冠婚葬祭の歴史－人生儀礼はどう営まれてきたか－』、水曜社
梅棹忠夫、1990、『梅棹忠夫著作集第7巻』、中央公論社
A. ゴフマン、浅野敏夫訳、2012、『儀礼としての相互行為－対面行動の社会学－』、法政大学出版局
志田基与師、1991、『平成結婚式縁起』、日本経済新聞社
田澤昌枝・境新一、2004、「挙式・披露宴におけるブライダルビジネスの現状と戦略」、『東京家政学院大学紀要』第44号
田中巖、2014、「ブライダル産業の潮流を知る－トレンドは列席者も主役のシェアード婚－」、オータパブリケーションズ「ブライダル業界就職・転職ガイド」編集部（編）、『2016年ブライダル業界就職・転職ガイド』
同志社（編）、2013、『新島襄自伝－手記・紀行文・日記』、岩波書店
堂上昌幸、2006、『よくわかるブライダル業界』、日本実業出版社
A.R. ホックシールド、石川准・室伏亜希訳、2000、『管理される心－感情が商品になるとき－』、世界思想社

- E. ボブズボウム・T. レンジャー（編）、前川啓治・梶原景昭他訳、1992、『創られた伝統』、紀伊國屋書店
D. リースマン、1964、『孤独な群衆』、みすず書房

《参考 HP》

厚生労働省、平成 29 年我が国の人口動態

（http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/toukei/）、2018/01/17 取得

同上、平成 27 年人口動態統計月報年計（概数）の概況

（<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/>）、2018/01/06 取得

ブライダル総研、結婚トレンド調査

（<http://bridal-souken.net/>）、2018/09/10 取得